ドクター内田のジャズは友達

△①▽

愛知県岡崎市在住のお医者さん、内田修さんは、熱心なジャズ愛好家として知られる。そのドクター内田が、本紙に「ジャズに乾杯！」を連載したのは、昭和六十一年六月から八月まで。久しぶりに、ジャズについて自由に書いて頂いた。題して「ドクター内田のジャズは友達」――。

「続編は〝ジャズは友達〟というのはどうですか」。気の早い方もおられるもので、やっと連載が終わったというのに、その打ち上げの席で、もうそんなアイデアを出して下さった人がいた。書く身にとっては結構、プレッシャーになるお話だったが、ともかく早いもので、あれから三年近くなる。

きままな交遊録に

その間、思い出したように、この題の意味を考えてみたが、僕なりの解釈では、「ジャズは僕の人生にとって、なくてはならない友達のようなもの」とも言えようし、また「ジャズは、うれしい友人をつくるすてきなきっかけを生む」というふうにも考えてよいだろう。

先回の〝ジャズに乾杯！〟では、「名古屋のジャズの歴史にかかわった事柄を」というある種の制約があったが、今回は、こだわりなく自由に交遊録をというお話だから、勝手気ままを許して頂いて、思いつくまま筆を進めようと思っている。

どちらにしても、「書斎派ジャズファン」（つまり、「リスニングルームにこもってレコードを相手に一人楽しむ」という意味だけれど）ではなく、いわゆる「ジャズの現場」に出没して、身をもって体験したことをお話してゆくことになる。

燃焼できるジャズ だが生活はできぬ

ところで、先回のおしまいに、ちょっと格好よく、「ジャズの修羅場をくぐり抜けて来たような気がする」なんて言ってしまったが、実は言いかえると、「ジャズでの巡り合わせにとても恵まれていた」というつもりなのだ。

すぐれたグループ

そこで、まずはじめに、つい最近、ライナーノート（レコード解説）を書いたばかりのグループの男たちをご紹介することにしよう。

皆さんは峰厚介（テナーサクス）、板橋文夫（ピアノ）、井野信義（ベース）、村上寛（ドラム）という四人の名前をご存じだろうか。

「そんな失礼な、ちゃんと知ってるよ」という方もおられようし、「どうもあまり有名でもなさそうだなあ」。そのどちらもあたっている。

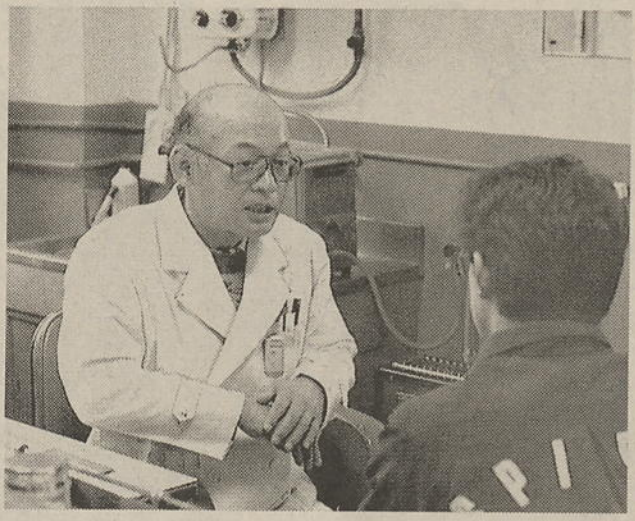
なるほど、この四人の演奏は、テレビではもちろんのこと、ステージでも聴く機会はほとんどない。もっぱら、ジャズファンの集まるライブスポットでしか接することはできないだろう。でも僕は、彼らこそ、現在の日本で最もすぐれたジャズを聴かせてくれる、最高のグループだと自信をもって言うことができる。

そのあたりが「ジャズは大衆の音楽だ」と言われながらも、「ミュージシャンにとっては、経済的に厳しい音楽」というつらさがある。分かりやすく言えば「ジャズでは食えない」のだ。

金を持ってこない

数年前、峰、村上は「ネイティブサン」という、人気抜群のフュージョングループのスター的存在で、各地のステージで熱狂的に迎えられたものだ。しかし根っからのジャズメンの二人、音楽的にはそのあり方に耐えられなかったんだろうねえ。結局、自らを燃焼できるジャズの世界に戻ってきた。

でも、奥さんは言ってたなあ。「本人は、とても気持ち良さそうですけれど、お金を持って来なくなりました。フフフ……」



本職は外科の医師、患者を診察する内田修さん＝愛知県岡崎市の内田病院で

内田修さん　昭和四年十月五日、愛知県岡崎市生まれ。名古屋大学医学部を卒業、家業を継いで医師になり、現在同市の内田病院院長。学生時代からジャズの魅力に取りつかれ「ナゴヤ・ヤマハ・ジャズ・クラブ」の名誉会長などを務める。著書に『ジャズが若かったころ』（晶文社）などがある。